

主 題：旧約に見る神の救いのご計画 14

聖書箇所：出エジプト記 1章1節－3章15節

今から何十年も前、20歳半ば位かと思いますが、最初の自家用車を手に入れて、その頃は高石市に住んでいたの、そこから旧26号線を通って浜寺公園から鳳街道に向かって右折をして教会に行こうとしていました。少し進んだところで踏切に遮断機が降りていました。ところが、ブレーキを踏んでも車が止まらない。あわてました。電車にぶつかるではないか！と。皆さんならどうされるでしょうか？理想的な答えは「神さま、助けてください！今、この車を止めてください！」と、そうすると車は止まって助かったと、すばらしい証になりますね。この話をするのは今回が初めてです。でも、本当はそうではなかった。これは大変なことになったととてもあわてました。スピードは余り出ていませんでしたが、このまま進んだらどうなるのか…と。このとき私がしたことはもう何度も何度もブレーキを踏みました。そうすると、踏切の手前で車は止まったのです。なぜか分かりません。電車が通り過ぎてから、そのときはオートマチックではなかったの、ギアをローに入れてゆっくりと教会まで進んで行ってようやく止めたことを覚えています。

振り返って考えてみると、あのまま踏切に突っ込んで電車にぶつかっていたら今ここにはいません。なぜこのことを話さなかったのか？その時「神さま、助けてください！」と言わなかった自分がそこにいたからです。今日は、神はいつも私たちとともにおられるということを皆さんとごいっしょに考えたいと思います。そのときも、神がともにいてくださるから大丈夫、必ず止まる！と思えばよかったのですが、神さまのことは頭になくて、もうどうすればいいのか分からず一生懸命ブレーキを踏んだのが実際の姿です。後で聞くと、ブレーキを何度も踏めば止めると教えられたのでそれで止まったのか…と。知らないことでしたが、実際のことを考えたとき、神さまは私を助けてくださったと、いつもそのことを思うとき、神さまはともにおられたのだと教えられます。

本題に入ります。

聖書は旧約・新約を合わせて1巻の書物です。また、旧約は新約を、新約は旧約を理解するために、それぞれ大切な位置を占めています。

ローマ1：2、3「：2 —この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、：3 御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、」

ローマ15：4「昔書かれたものは、すべて私たちに教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。」

ヨハネ14：6「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

今日は、出エジプト記1：1から3：15までをごいっしょに学びたいと思います。

出エジプト記1：1は「さて、ヤコブといっしょに、それぞれ自分の家族を連れて、エジプトへ行ったイスラエルの子たちの名は次のとおりである。」という書き出しで始まっています。

著者： モーセ、旧約聖書の最初の5書、創世記から申命記まではモーセが記したと言われてい

ます。そのことが分かるのは、17：14「【主】はモーセに仰せられた。「このことを記録として、書き物に書きしるし、ヨシュアに読んで聞かせよ。わたしはアマレクの記憶を天の下から完全に消し去ってしまう。」、また、24：4にも「それで、モーセは【主】のことばを、ことごとく書きしるした。そうしてモーセは、翌朝早く、山のふもとに祭壇を築き、またイスラエルの十二部族にしたがって十二の石の柱を立てた。」と記されているからです。また、新約聖書でも、マルコ1：44「そのとき彼にこう言われた。「気をつけて、だれにも何も言わないようにしなさい。ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして、人々へのあかしのために、モーセが命じた物をもって、あなたのきよめの供え物をしなさい。」、ヨハネ7：19－22「：19 モーセがあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも、律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか。」：20 群衆は答えた。「あなたは悪霊につかれています。だれがあなたを殺そうとしているのですか。」：21 イエスは彼らに答えて言われた。「わたしは一つのわざをしました。それであなたがたはみな驚いています。：22 モーセはこのためにあなたがたに割礼を与えました。——ただし、それはモーセから始まったのではなく、父祖たちからです——それで、あなたがたは安息日にも人に割礼を施しています。」と、このようにモーセが書いたことをイエスが証言しておられます。

出エジプト記は、まさに、イスラエルの民がモーセに率いられてエジプトを出たその記録ですが、実際のタイトルはどのようなものであったのか？その名についてユダヤ人たちは「名は次の通りである」

とか、単に「名」と呼んでいたと伝えられています。70人訳では「エクソダス」（ギリシャ語）とい

こ
とばが用いられていて、このことばの意味は「出口、脱出」です。ここから、この書の全体を学ぶときに、イスラエルの民がエジプトを脱出した、翻って、現在に至るまで聖書を読むときに、私たちに罪人がいかにしてその罪から抜け出すことができたのかを教えている書であると言えます。

冒頭の「さて」はヘブル語の「ウェ」という接続詞が使われていて、その意味は「始まり」です。また、「さて、そして、」ということ、何の続きなのか？創世記の続き、創世記があって「さて、そして、」ということ、過去にあった出来事が現在どうなっているのか？そして、これからどうなるのか？ということ、を教えていると言えます。

序論： 神がイスラエルの民を買い取られて所有とし、ご自身の宝とされるということが19：5に記されています。「今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中にあつて、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。」、まさに、イスラエルの民が約束の地カナンへと救い出された「贖いの書」であると教えられます。

1. モーセ

主人公は「モーセ」となります。モーセの一生は120年ですが、今日はそのうちの80年について学びたいと思います。

1. ヤコブ130歳のとき、家族とともに70人でエジプトへ

創世記46：27「エジプトでヨセフに生まれた子らはふたりで、エジプトに行ったヤコブの家族はみなで七十人であった。」、エジプトで17年暮らして147歳でヤコブは死んだと記されています。創世記47：28「ヤコブはエジプトの地で十七年生きながらえたので、ヤコブの一生の年は百四十七年であった。」、5-6節には「：5 ヤコブから生まれた者の総数は七十人であった。ヨセフはすでにエジプトにいた。：6 そしてヨセフもその兄弟たちも、またその時代の人々もみな死んだ。」と記されています。エジプトのために大変に貢献したヤコブの11番目の子ヨセフは、その非常な功績によってエジプトの王様の次の位である今で言うなら総理大臣の地位に就いたことを聖書は教えています。そのヨセフも死んでしまった。ところが、イスラエルの民の状態は「イスラエル人は多産だったので、おびたしくふえ、すこぶる強くなり、その地は彼らで満ちた。」と7節に記されています。人口が非常に増えていったのです。

***神の約束**： イスラエルが神の契約を守るなら、神がイスラエルの民を買い取られ、所有して、ご自分の宝とされる。=19：5=

***エジプト**： 現在の人口は約9千万人と言われるが、当時は150万から500万人位であったろうと言われていて、人口としては少なかった時代でした。そのような中でイスラエルの民が非常に増えていったという状況があったわけ、それに対してどのようなことが起こって来るのか？そのことがこの「出エジプト記」の始まりです。土地の96%というほとんどが砂漠地帯で、残りの4%は世界一の長さのナイル川流域（幅3～32km、長さ6650km）の河口地帯で、そこに人口の99%が住んでいました。そのような中にエジプト人とイスラエル人が住んでいたのです。

1) イスラエルの民、増え広がる（1：1-7）

・「生む」とはヘブル語で「多産だった」という意味があります。また、「群がる」はヘブル語で「おびたしく」で、創世記1：28には神が人を造られたときにアダムとエバに「神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」という命令を与えています。このようにイスラエルの民はエジプトでまさにこのような状況にあったと見るができます。

2) ヨセフ亡き後、イスラエルの民は奴隷に（1：8-14）

・**ヨセフを知らない新しい王の出現** = そのことが8節に書かれています。恐らく、トトメス3世ではないかと言われてはいますが、いろいろな説があるので断定はできません。トトメス3世なら紀元前1290年から1436年頃になります。

・**イスラエルの民の増加防止策** = おびたしく増えたイスラエルの民のこと、たとえば、リビングバイブルでは「一つの国といってもよいほどの勢力に膨れ上がった。」と書かれています。一国を築けるほどの人口で、エジプト人とほとんど変わらない数になった。そこで、新しい王は考えるのです。9-10節「：9 彼は民に言った。「見よ。イスラエルの民は、われわれよりも多く、また強い。：10 さあ、彼らを賢く取り扱おう。彼らが多くなり、いざ戦いというときに、敵側についてわれわれと戦い、この地から出て行くといけなから。」と。

・**過酷な労働** = そこで彼らを苦しめるために重労働をさせるのです。11節「そこで、彼らを苦役で苦しめるために、彼らの上に労務の係長を置き、パロのために倉庫の町ピトムとラメセスを建てた。」と。しかし、12節を見ると「しかし苦しめれば苦しめるほど、この民はますますふえ広がったので、人々はイスラエ

ル人を恐れた。」と言います。エジプト人がイスラエル人を恐れた状況が分かります。それで、エジプトはさらに過酷な労働を課すのです。13-14節「13 それでエジプトはイスラエル人に過酷な労働を課し、14 粘土やれんがの激しい労働や、畑のあらゆる労働など、すべて、彼らに課する過酷な労働で、彼らの生活を苦しめた。」。

3) モーセ誕生前の出来事 (1:15-22)

・強制労働の失敗 ⇒ イスラエル人は益々増えていった。
・男子の赤子殺害を指示 ⇒ さらに、エジプト王はヘブル人の助産婦二人にこのようなことを命じます。16節「ヘブル人の女に分娩させるとき、産み台の上を見て、もしも男の子なら、それを殺さなければならない。女の子なら、生かしておくのだ。」と。しかし、この助産婦たちはエジプト王よりも神を恐れていたのです。その命令には従わなかったのです。そして、「…男の子を生かしておいた。」と17節に書かれています。王は助産婦たちを呼び出します。18-19節「18 そこで、エジプトの王はその助産婦たちを呼び寄せて言った。「なぜこのようなことをして、男の子を生かしておいたのか。」19 助産婦たちはパロに答えました。「ヘブル人の女はエジプト人の女と違って活力があるので、助産婦が行く前に産んでしまうのです。」、神は彼女たちに良くしてくださったと20節に書かれています。「神はこの助産婦たちによくしてくださった。…」、
ですから、「それで、イスラエルの民はふえ、非常に強くなった。」いうことです。

王はさらに考えます。次にはエジプト全土に命令します。22節「また、パロは自分のすべての民に命じて言った。「生まれた男の子はみな、ナイルに投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかなければならない。」と。このような状況が起こっていたと、私たちは1章で見ることができます。

2. モーセの生涯 (最初の80年)

* イスラエルの民に対する神の救いのご計画

1) モーセ誕生 (2:1-14)

2:1-3「1 さて、レビの家のひとりの人がレビ人の娘をめぐらした。2 女はみごもって、男の子を産んだが、そのかわいいのを見て、三か月の間その子を隠しておいた。3 しかしもう隠しきれなくなったので、パピルス製のかごを手に入れ、それに瀝青と樹脂とを塗って、その子を中に入れ、ナイルの岸の葦の茂みの中に置いた。」と、生後3ヶ月でナイル川へもって行かれます。そして、その子の姉がこの後どうなるのか?と様子を見ます。4-5節「4 その子の姉が、その子がどうなるかを知ろうとして、遠く離れて立っていたとき、5 パロの娘が水浴びをしようとナイルに降りて来た。彼女の侍女たちはナイルの川辺を歩いていた。彼女は葦の茂みにかごがあるのを見、はしためをやって、それを取って来させた。」

・パロの娘に拾われて宮廷で育てられる = 6節「それをあけると、子どもがいた。なんと、それは男の子で、泣いていた。彼女はその子をあわれに思い、「これはきっとヘブル人の子どもです」と言った。」、ヘブル人の赤子であることが分かったのです。

・実母ヨケベテが乳母となる = その様子を見ていた姉が言います。7-9節「7 そのとき、その子の姉がパロの娘に言った。「あなたに代わって、その子に乳を飲ませるため、私が行って、ヘブル女のうばを呼んでまいりましょうか。」8 パロの娘が「そうしておくれ」と言ったので、おとめは行って、その子の母を呼んで来た。9 パロの娘は彼女に言った。「この子を連れて行き、私に代わって乳を飲ませてください。私があなたの賃金を払いましょう。」それで、その女はその子を引取って、乳を飲ませた。」、このような出来事が起こったのです。もちろん、神のご配慮です。

10節「その子が大きくなったとき、女はその子をパロの娘のもとに連れて行った。その子は王女の息子になった。彼女はその子をモーセと名づけた。彼女は、「水の中から、私がこの子を引き出したのです」と言ったからである。」、モーセ、その名はヘブル語で Mosheh マーシャ、「引き出す」という意味です。エジプト語では Mesu モセ、「産む、引き出す」で、また、このことばの意味は「～の子」という意味があります。だから、「私の子」という意味もあるのです。「モーセ」と名付けられました。

このように、王女の息子として宮廷で彼は成長していったのです。あらゆる学問が施され、知識が蓄えられ、自分を鍛えるために様々な技術を学んだに違いないでしょう。

・モーセが大人になったときの出来事 (2:11-14) = 11節に「こうして日がたち、モーセがおとなになったとき、彼は同胞のところへ出て行き、…」とあります。モーセが40歳になったときと聖書は教えています。使徒の働き7:23「四十歳になったころ、モーセはその兄弟であるイスラエル人を、顧みる心を起こしました。」と。彼はどのようなことをしたのか?自分はエジプトの王子として育てられたけれど、ヘブル人であることはよく分かっていたので、いったい、自分の同胞はどのようなのか?ということによって彼はその様子を見に出かけます。そこで同胞の「…その苦役を見た。そのとき、自分の同胞であるひとりのヘブル人を、あるエジプト人が打っているのを見た。」、モーセは同胞を助けなければいけないとして、「12 あたりを見回し、ほかにだれもいないのを見届けると、彼はそのエジプト人を打ち殺し、これを砂の

中に隠した。」と続きます。同胞を助けるという良い目的でしたが、殺人という行為を犯してしまったのです。だから、「これを砂の中に隠した。」のです。

翌日、彼はまたそこへ出て行きます。13-14節「:13 次の日、また外に出てみると、なんと、ふたりのヘブル人が争っているではないか。そこで彼は悪いほうに「なぜ自分の仲間を打つのか」と言った。:14 するとそ

の男は、「だれがあなたを私たちのつかさやさばきつかさにしたのか。あなたはエジプト人を殺したように、私も殺そうと言うのか」と言った。そこでモーセは恐れて、きっとあのことが知れたのだと思った。」と書かれています。当然です。そのとき助けられたヘブル人が知っていますから、恐らく、彼から聞いたのでしょう。だれも見えていないとしてもそういうことはすぐに知れ渡ることです。モーセの行為は同胞から受け入れられなかったのです。

当然のことですが、このことはエジプト王パロにも知れ渡り15節「パロはこのことを聞いて、モーセを殺そうと捜し求めた。…」、彼はエジプトの王子ではない、ヘブル人だ。エジプト人を殺すなどもっての外だということです。

2) 40歳のときミデヤンの地へ (2:15-22)

モーセはパロから逃れます。彼が40歳の時の出来事が使徒の働きにも記されています。7:23-24「:23 四十歳になったころ、モーセはその兄弟であるイスラエル人を、顧みる心を起こしました。:24 そして、同胞のひとりが虐待されているのを見て、その人をかばい、エジプト人を打ち倒して、乱暴されているその人の仕返しをしました。」、7:30「:30 四十年たったとき、御使いが、モーセに、シナイ山の荒野で柴の燃える炎の中に現れました。」

・ミデヤンでの出会い = ミデヤンの地である人たちとの出会いが待っていました。15節後半「…しかし、モーセはパロのところからのがれ、ミデヤンの地に住んだ。彼は井戸のかたわらにすわっていた。」、16節から「:16 ミデヤンの祭司に七人の娘がいた。彼女たちが父の羊の群れに水を飲ませるために来て、水を汲み、水ぶねに満たしていたとき、:17 羊飼いたちが来て、彼女たちを追い払った。すると、モーセは立ち上がり、彼女たちを救い、その羊の群れに水を飲ませた。」と、このような出来事が記されています。そして、「:18 彼女たちが父レウエルのところに帰ったとき、父は言った。「どうしてきょうはこんなに早く帰って来たのか。':19 彼女たちは答えた。「ひとりのエジプト人が私たちを羊飼いたちの手から救い出してくれました。そのうえその人は、私たちのために水まで汲み、羊の群れに飲ませてくれました。':20 父は娘たちに言った。「その人はどこにいるのか。どうしてその人を置いて来てしまったのか。食事をあげるためにその人を呼んで来なさい。」とこのようなことがあって、21節には「モーセは、思い切ってこの人といっしょに住むようにした。そこでその人は娘のチッポラをモーセに与えた。」と書かれています。そして、22節「彼女は男の子を産んだ。彼はその子をゲルシヨムと名づけた。「私は外国にいる寄留者だ」と言ったからである。」。

モーセはエジプトから逃げてミデヤンの地に来て、自分は「寄留者だ」と言って子どもにそのような名を付けるのです。ミデヤンはシナイ半島の東南に位置し、ミデヤン人はアブラハムの子孫です（創世記25:1-2「:1 アブラハムは、もうひとりの妻をめとった。その名はケトラといった。:2 彼女は彼に、ジムラン、ヨクシャン、メダン、ミデヤン、イシュバク、シュアハを産んだ。」）。ケトラの子ということです。

・神はアブラハムとの契約を思い出された (2:23-25) = 「:23 それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエル人は労役にうめき、わめいた。彼らの労役の叫びは神に届いた。」と、多くの日を経て、その40年後です（7:7「彼らがパロに語ったとき、モーセは八十歳、アロンは八十三歳であった。」）、モーセは80歳になっていましたが、イスラエル人の状況は変わりませんでした。24節に「神は彼らの嘆きを聞かれ、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。」とあります。そして、25節「神はイスラエル人をご覧になった。神はみこころを留められた。」と、このような状況が記されています。神はこのようにしてモーセ、その家族、そして、イスラエルの民の状況をご覧になったということを見るのが出来ます。

3) ホレブ(シナイ山)で召命を受ける (3:1-10)

・しゅうとイテロの羊を飼っていた = 3:1「モーセは、ミデヤンの祭司で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていた。」、イテロとは2:18に記している「レウエル」と同じ人です。「…彼はその群れを荒野の西側に追って行き、神の山ホレブにやって来た。」とあります。ホレブとは「神の山」です。ここである出来事が起こります。

・主の使いが現れた = 3:2「すると【主】の使いが彼に、現れた。柴の中の火の炎の中であった。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。」、モーセは「不思議なことがあるな」と、3-4節に

「:3 モーセは言った。「なぜ柴が燃えていかないのか、あちらへ行ってこの大いなる光景を見ることにしよう。」:4 【主】は彼が横切って見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ」と仰せられた。彼は「はい。ここにおります」と答えた。」、このように書かれています。

この「【主】の使い」とはいったい何者でしょう？これは天使ではなく「神」だと言われています。4節には「【主】は彼が横切って…神は柴の中から…」と神の名について【主】、あるいは「神」という名が使われています。「神」は「エロヒム」、【主】はヤハウエです。このことばの意味はまた後に学びますが、2節の「【主】の使い」は別の表現が使われています。これは神の第2位格である「子なる神」であると言われます。ですから、柴の中に現われた「【主】の使い」は子なる神、イエス・キリストの顕現であったということを見ることができます。第1位格である父なる神の場合は、4節にあるようにエロヒム（神）、あるいは、ヤハウエ（主）という名で呼ばれます。遡って、創世記には「神である主は、」ということばが用いられていますから、明らかに、この「【主】の使い」は特別な存在だと見ることができるのです。このことはまた新約聖書においても明らかになります。

・神の命令 = この不思議な状況が起きたときに神は言われます。3:5「神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」と。聖なる場所にはくつを脱いで上がるという、これは当時の習慣であったようでこのような命令がなされます。

・神の宣言 = 6節「また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」、あなたの父祖の神、祖先の神であると、神は創世記ですとそのようにイスラエルの民に宣言して来られました。このお方がこのように言われたのです。「モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。」とあります。

・神のご計画（3:8-10） = 7節「【主】は仰せられた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。」と、2:24で「…神は彼らの嘆きを聞かれ、」と見たことをここで言われたのです。そして、彼らをエジプトの手から救い出して先祖に約束したその地に彼らを上らせると言われます。広い地、乳と蜜の流れる地、神が約束されたカナンへと。民数記13:27「…そこにはまことに乳と蜜が流れています。…」。

9-10節「見よ。今こそ、イスラエル人の叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプトが彼らをしいたげているそのしいたげを見た。」、何回もその苦しみを見たと言われています。「:10 今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」と、これがモーセに対して神がなされた命令です。

確かに、王の娘の子として育てられたモーセでしたが、今は殺人者としてエジプトから逃れてこのミデヤンの地に逃げている犯罪者でもあるその人間に対して神はこのよう言われたのです。11節を見ると「モーセは神に申し上げた。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行きイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならぬとは。」と、私は単なる犯罪人に過ぎません。パロのもとに行ったら私は殺されますと、モーセはこのように答えています。

神が仰せられたことは「わたしはあなたとともにいる。」（11節）です。14節にも「わたしは、『わたしはある』という者である。」とあり、神の存在がいかなるものであるかをモーセに言われました。「恐れるな、エジプトの王の所に行っても大丈夫だ」ということを暗示して言われるのです。

4) モーセへの教示（12節）

・神は必ずモーセとともにおられる = ヘブル語では「エヘイエ・インマール」ということばが用いられていますが、HYHという文字が使われています。

・わたしがあなた（モーセ）を遣わす = このお方があなたをイスラエルの民をエジプトから連れ出すために用いると言われたのです。モーセの疑問は単純でした。私は殺人者として追われているし、イスラエル人の中に行っても「あいつは人殺しだ」と言われるような者です。そういう私がそのようなことをしても大丈夫なのですか？と言います。

5) 「その名は何ですか」（13-14節）

13節「モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました』と言えば、彼らは、『その名は何ですか』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」、私の孫の仰生ですが、普段は「じいじ」と呼ぶのですが、私が部屋で座っていると前に来て「君はだれだ！」と聞きます。私がだれか分かっているのですが、そこで私も聞きます、「君はだれだ！」と。「私はタロウだ！」「えっ君は仰生じゃないのか？」、「僕はタロウだ！」、実は、その時彼はウルトラマンタロウになっているのです。そこで私は「バルタン星人だ！」とやりとりをして戦いが始まるのですが、名前を聞いて「あなたはだれ？」、「私は和智です」「仰生です」というのが普通のことです。

*マ・シェモー = 本来なら、ここで「ミー・シムカー」「あなたはだれ？」ということばが使われなければならなかったのですが、実は、マ・シェモー（ヘブル語）です。「マ」とは「その本性は何ですか？」という意味です。「私はあなたの名をよく知っています。でも、名は知っているけれどその意味はよく分かっていません。どのようなお方なのですか？」と問うたのです。

・【わたしはある】YHWHヤハウエ = 神の答えは14節「神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある』という者である。また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた』と。」です。すなわち、「ヤハウエ」という名だと言います。YHWHと聖4文字と言われています。ことばの意味は「あつてあるもの、あるべくしてあるもの、」と、単に存在しているということではなく、「あろうとしてある、意志をもってそこに存在している」、そういう者だと神は答えたということです。「わたしは存在していた、今、わたしは存在していて、また、これからも存在するであろう」、過去、現在、未来に亘って存在し続けると、これは「永遠」ということばの意味です。

神の名をモーセは尋ねたのですが、神はこのようにしてご自分の本質は何かということをお教えされたのです。ちなみに、私たちは「神の本質は何か？」と聞かれるなら、恐らく、皆さんはよくご存じだと思いますが、まず、「神は霊」です。神は目に見えない、だから、「霊とまことをもって礼拝しなさい」とヨハネの福音書4：24でイエスが言われた通りです。また、「自存」、「わたしはあつてあるものだ」と、だれからもサポートされなくて独立して存在するものだということです。「無限」、これは空間的にですから、どこにでもおられるという意味を持っています。物質の中であろうが外でも距離に関係なく存在することが出来るお方です。また、「永遠」という時間的に初めも終わりもない存在です。だから、いつも「わたしはある」という存在、そういう本質を持った神を私たちは知っています。

でも、当時のイスラエルの民は知らなかった。彼らは「エルシャダイ」、「全能の神」としてしか知らなかったのです。6：3「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに、全能の神として現れたが、【主】という名では、わたしを彼らに知らせなかった。」、創世記17：1「アブラムが九十九歳になったとき【主】はアブラムに現れ、こう仰せられた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。」、だから、ここでモーセが聞いたのです。神は彼に「わたしは永遠に自存している神」であることを教えられました。だから、このわたしがあなたをパロのところに遣わしてエジプトにいる民を脱出させるから「行きなさい！」と言われたのです。そうして、彼は神によってみことばを得て、やがて、イスラエルの民をエジプトから脱出させるその働きに用いられるようになるということです。

6) 神の命令 (15節)

3：15「神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエル人に言え。あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】が、私をあなたがたのところに遣わされた、と言え。これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である。」、創世記15：13には「そこで、アブラムに仰せがあった。「あなたはこの事をよく知っていなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。」と、このように神はアブラハムに仰せられたとあります。だから、イスラエルの民はヨセフがいた時は良かったのですが、ヨセフが亡くなって、その当時の王が亡くなった後四百年間、エジプトで苦しめられる、寄留者となるということが創世記で預言されていたのです。そのことを私たちは見ることができます。大体、紀元前1870年から1440年の間ではないかと言われています。聖書は400年とか430年と教えていますが、この間、彼らはエジプトで苦しみに会わなければならなかったというわけです。

そして、イスラエルの民は約束の地カナンへとモーセに導かれて行くのです。いったい、それはいつ頃か？いろいろな説がありますが、一つの節は紀元前の1450年頃だろうと言われます。なぜなら、I列王記6：1を根拠にしているというわけです。「イスラエル人がエジプトの地を出てから四百八十年目、ソロモンがイスラエルの王となってから四年目のジブの月、すなわち第二の月に、ソロモンは【主】の家の建設に取りかかった。」と。恐らく、これがもっとも近いと言われていますが、他の節もあるので確定的にこれだということは言えません。この四百年間エジプトに寄留して、モーセによって導かれ、いよいよ脱出するという出来事がここに記されているのです。

II. 新約聖書の解き明かし

1. モーセ、来るべき救世主の型 (旧約の預言と新約の人々の反応)

1) 旧約の預言

申命記18：15「あなたの神、【主】は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。」、34：10「モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼を【主】は、顔と顔を合わせて選び出された。」。

「私のようなひとりの預言者」とは来たるべきイエス・キリストのことです。なぜなら、使徒の働き 7 : 37 に「このモーセが、イスラエルの人々に、『神はあなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる』と言ったのです。」と、ステパノがこのように証言しているからです。使徒 3 : 22 にも「モーセはこう言いました。『神である主は、あなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。この方があなたがたに語ることはみな聞きなさい。』」と書かれています。「ひとりの預言者」とはイエス・キリストだと言います

2) 新約の人々の反応

・あの預言者? = 当時の人々はどのような反応をしていたのでしょうか? ヨハネの福音書 1 : 21 「ま

た、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「そうではありません。」

「あなたはあの預言者ですか。」彼は答えた。「違います。」、バプテスマのヨハネがやって来たそのとき、

人々はこのように聞きます。「彼ら」とは「ユダヤ人たちが遣わした祭司とレビ人」です (1 : 19)。バプテスマのヨハネははっきりと「そうではありません」「違います」と答えています。

・来たるべき預言者? = ヨハネ 6 : 14 には「人々は、イエスのなさったしるしを見て、「まことに、この方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言った。」と書かれています。イスラエルの人々はイエスがなさったしるしを見て、あのモーセが申命記で言った「私のようなひとりの預言者」はこのお方だと言ったのです。「しるし」は、あのガリラヤ湖で少年が持っていた 2 匹の魚と 5 つのパンだけで成人男性が 5 千人以上、子どもと女性を合わせるとさらに 2 倍 3 倍の人々がいたでしょう、その多くの人々を養ったこと、その出来事を見た人々は、イエスがそのような不思議なことをされたので「あの預言者に違いない」と思ったのです。

・イエスの証言 = イエスご自身もヨハネ 5 : 46 で「もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずで。モーセが書いたのはわたしのことだからです。」と証言されています。

2. 預言者イエス

また、イエスはこのように言われています。ヨハネ 14 : 10 「わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」と。まさに、預言者とはそういうものです。「父なる神が語られたことをわたしが代弁しているのだ、預言者としての働きをしている」とここで言われたのです。また、マタイ 13 : 57 には「こうして、彼らはイエスにつまずいた。しかし、イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、家族の間だけです。」ということが書かれています。

3. 山上の変貌

このような出来事がありました。「山上の変貌」です。ルカの福音書 9 : 28 - 31、この並行箇所はマタイ 17 : 1 - 8、マルコ 9 : 2 - 8 です。このように記されています。「:28 これらの教えがあつてから八日ほどして、イエスは、ペテロとヨハネとヤコブとを連れて、祈るために、山に登られた。:29 祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く光り輝いた。:30 しかも、ふたりの人がイエスと話し合っているではないか。それはモーセとエリヤであつて、」、ここにモーセが出て来て、イエスと話をしていたということです。どのようなことを話していたのか? 「:31 栄光のうちに現れて、イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していたのである。」と書かれています。

実は、この「ご最期」ということばはギリシャ語の「エクソドス」が使われています。いかにして人々をエクソドス、脱出させるのか、罪の世界から脱出させる、そのことについてエリヤとモーセとイエスが話し合っていたということです。ペテロとヨハネとヤコブはそれを見たというわけです。新約聖書でも、「あの預言者」、「やがて来られるその方」はイエス・キリストであるということをも多くの人たちが認識していたということです。私たちはもちろん、新約聖書を手にしていますからよく分かります。

終わりに : 私たちの責任

そして、私たちは大命令という責任を見ることができます。マタイ 28 : 19 - 20 「:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、:20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」、「命じておいたすべてのことを守るように」とは実践しなさいということです。ただ勉強だけでなく実践が大事だと言います。そして、「彼らを教えなさい」と現在分詞が使われていますから、「教え続けなさい」と言います。「世の終わりま

で、」神は「あなたがたとともにいます。」、これがギリシャ語の「エゴ・エイミ」です。「常におられます」ということです。

最初に車のブレーキが効かなかった話をしましたが、「神がともにおられる」と私たちはよく知っています。でも、何かあったときに「神さま、助けてください。」と言うその前に自分で何とかしようとし、まさにそうです。何とかしようとして焦ってブレーキを何度も踏んで…、何とか止りましたが、それはたまたま止っただけ？ではなく、やはり神が助けてくださったと今でも確信しています。その時にどうして「神さま、助けてください！」と私自身が言わなかったのか？だから、いつもともにいてくださる神について私たちはもっと知らなければならないと思うのです。ぜひ、そのことを知っていただきたい。

聖書はこのようなことを私たちに教えています。エゴ・エイミなる神ですが、まず、神が私たちとともにおられます。Ⅱ 6 : 16 「神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」、「私たちは生ける神の宮、」「わたしは彼らの間に住み」、エペソ 3 : 17 「こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、」、「キリストが…あなたがたの心のうちに住んで」、エペソ 2 : 22 「このキリストにあって、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」、「あなたがたも…御霊によって神の御住まいとなる」、Ⅰコリント 6 : 19 では「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」、私たちは「聖霊の宮」と呼ばれています。

だから、神が常にとともにおられるということは、周りにおられるだけでなく私たちのうちにおられるということです。だから、私たちに何かあるとき「自分で何とかしよう」とする前に、「神さま、いつもともにいてくださって感謝します。あなたが助けてくださるから。」とこのように私たちは祈るはず。そのためにも私たちはもっと神のことを知らないといけません。イスラエルの民は「エルシャダイ、全能」という意味は知っていましたが、この神のことについてはこの時に「あってある者」と明らかになったのです。モーセはやがてこのことばの意味を本当に良く理解して、そして、イスラエル人たちのリーダーとして出エジプトを為していくことになるのです。

私たちもぜひ、この人生にあってこのような神のことを常に覚えていきたいと思えます。